



門
卷
421

大清



宣



忠孝比玉傳序

小說者曰史之餘也宋元時有一種

之小說家者及採問巷新事為宮闈

談資語多近俚意存諷諫矣吾邦

近來自京傳馬琴之徒裨史作家競

爽而所著書千室不能藏萬乘不能

月
三
日
印



載也然猶未窮盡其奧予友南德隱
醫養拙菴主人好新奇怪異之話曩
時採復讐志報之吏得於見聞者彙
爲五卷名曰忠孝比玉傳託予需序
予繙閱之卷中怪々奇々啻不娛目
使洞心有所懲勸矣竊喜主人之博

聞廣見其材秀於銛山其說明於鏡
浦也可驚可愛可歎可喜恰如醉人
獲衣裏寶珠茲知比玉之名不虛也
以術書賈文溪堂書賈讀之喜色見
鬚眉欣然而戲曰有比玉於斯韞匱
而藏諸早上梓而沽之哉沽之哉我

待價者也頻乞不休卽代主人與之
爾

文政八年辛酉正月

東都四方歌垣真額
書于狂歌堂南廂

忠孝比玉傳叙

甲子之春余遊京師既歸會患痰喘脇
痛短氣俄頃不能步竟廢業潛居于蝸
廬幾一年矣方書當友侶藥味爲奴僕
低頭拄頤鬱々消日更思無聊乃本
井定隆封內皆歸效法事跡戲作復雙

奇談數回題曰忠孝比玉傳即取其節
操光曜比玉之義也大太久卒之忠孝
東馬軍治之奸惡各至卒有其應報則
說鬼語怪不免嗤於高明亦一片婆心
私擬勸懲之意焉人物紀年訂之歷史
而實中有虛々中有實文間用漢語者

便因國家之文明欲使覽者簡誦讀且
一變近世稗史之體云

文政八年乙酉孟春

南總 養拙菴主人識









戒浄坊日行

藤代
久平

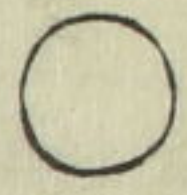


依客大鷹
推兵衛

腕
浄
佳境

澤井
軍治

繪本忠孝比玉傳總目錄



第一回

挑園置酒定隆評時諸侯

第二回

定隆潛行點檢松山城

第三回

泰師渡海符兇鎮逆浪

第四回

定隆驍勇鋸山斬白狼

第五回

定隆見義豐席上說兵略

第六回

大太純孝鄉里養盲母

第七回

虎海神會大太角觥夜叉面

第八回

本行寺看花磯吉挑玉江

第九回

東馬落魄仕坂井定治

第十回

君前比試平内擊倒東馬

第十一回

東馬結黨音信山殺平内

第十二回

若宮小路東訪醫生玄琢

第十三回

池鯉鯨道中東等危難

第十四回

祇園酒肆東馬竊贖東等

第十五回

權兵衛詐敷誘玉江狼谷

第十六回

二兇畏罪竊逃京師

第十七回

象頭山神廟東感靈驗

第十八回

兵庫旅亭東繼迎馬工雪村

第十九回

二兇逼迫共走中山道

第二十回

白嶺冒雪束報父讐

第二十一回

泰師嗣法日行隱居八幡

通計二十有一目次畢

忠孝比王傳卷之壹

養拙菴主人著

第一回

桃園置酒定隆評時諸侯

夫盛衰榮枯ハ天地の常理なりといへども。國家の治乱を
 人爲の善悪よする。故に明君ハ徳を修て其治を失
 せず。暗主ハ道を悖て自其乱を招く。吉凶禍福皆其徳の
 報よする。夏壁へハ影の響の如し。慎ざるべけんや。書云
 孽猶可遠自作孽不可逭。老子曰天網恢恢々々。而
 朝後土御門院の御宇に當つて足利將軍の政令不行。朝
 一度表くより陪臣國命と云々。細川山名の兩雄互に



起て京師應仁の亂後諸侯各國は擾て干戈と振ひ強ハ弱
と凌ぎ大ハ小と合せて天下終は戦争の衢とぞありける爰
上總国東金土氣兩城の主坂井小太郎定隆の由来と尋
元遠江州敷智郡の人民ありて富家の令子なり初より性
質聰敏矜御ありて頗る和漢の書籍と續事孫兵の兵略
に公家膺めあつて又四方壯士游侠と交りて駉ひ弓馬
刀劍の道と練磨し兼て出刃とぞむ幾ぬ家後より平山
勘六忠政藤代平内成久とて武伎の達者なり二箇の丈夫
ありて平生恩顧公加へて使ふまじ何れも忠節を忘ること
なぞぞ冊なる頃にも二月半過く東風池凍と解き物花

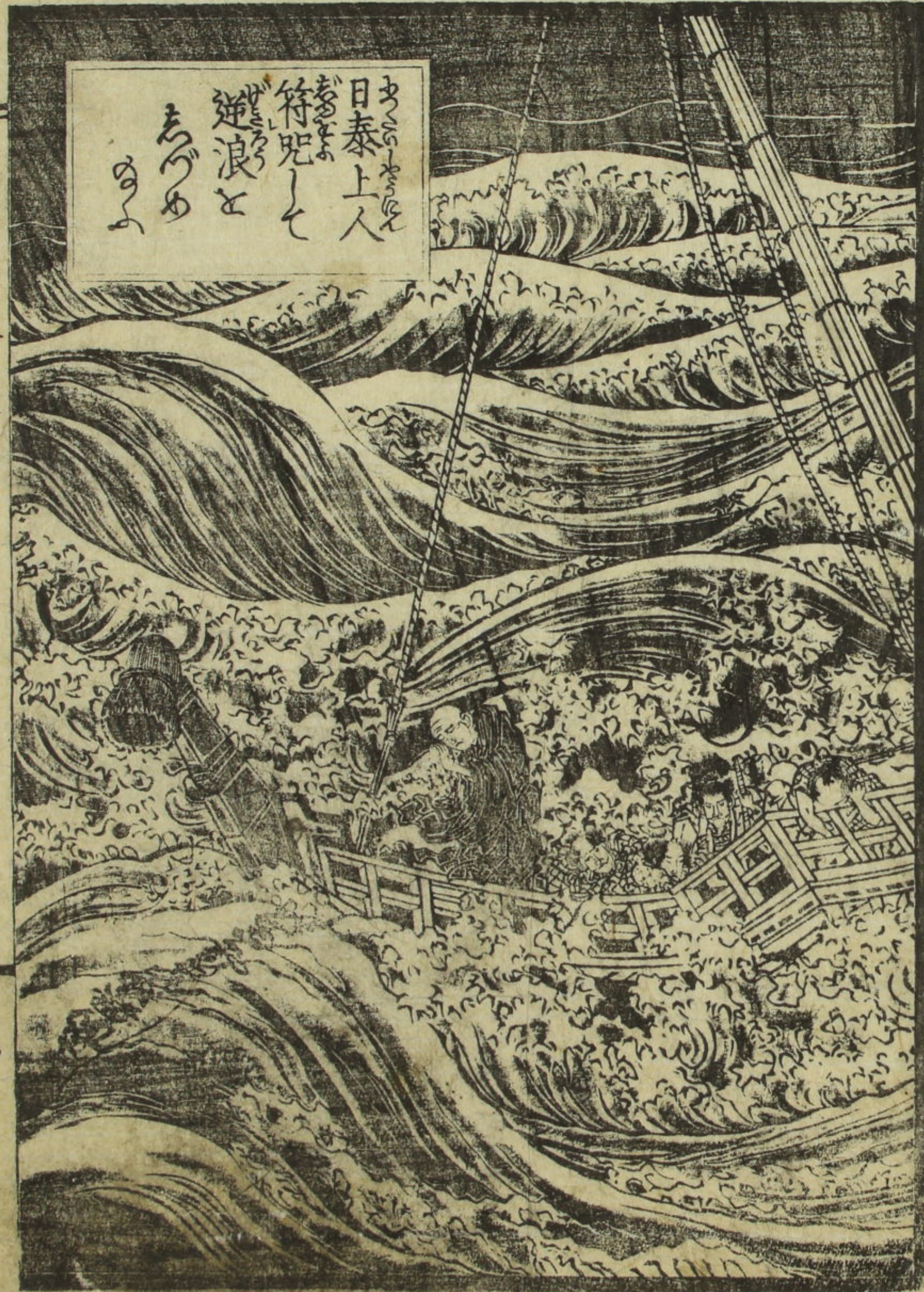
半散つぬまこと無柵放青て春色雁は前載の挑花嬢は
ぞ爛熳とて日定隆とて美奴は囀付し梅下は鑑鋪せ
酒饌と安排し兩士と共に酒酌とてぞ樂まむ定隆は
興は来して日今日の宴寔は勇一往昔二国の時劉玄徳
桃園の義と結ぶる夏あり卿等ハ余の関張とて戲しは
るる二士同声は答て日臣等暗昧の貨とてくとも密に深
明公の恩遇を荷ふ早晚この高名を附し奉るべきと有る
時は定隆美奴と退て私に低語りて日近來足利の政は
行天下兵亂る況と数年殆ど中原を居る時スラス大々
たれ者此運は臨て岨起せり封侯と得んて極曩中の物を

夏前ト夏は定きまる時ときハつ躡つす臣等しんらう目今いま名なくる諸侯しよこうとありて明公めいこうを
 糾しゆべし願ねがふハ明密めいみつは裁判さいばんありて後仕途のちのしと公定こうていめりと進すすめ
 ると定隆ていりゆう有あり趣そくとし獲とくと席せき公正こうせいとあり成なり久ひさ頭かぶは
 問とて日河内ひかふちの畠山はたけやま義豊ぎゆほう兵卒へいそ多おほく軍用ぐんよう足たりつと勢いきほに乘のり
 きて幾内いくないは跋扈はつこす是こゝは從したがうと如何いかん定隆ていりゆう曰い義豊ぎゆほう衆しゆを
 憑たもんで自傲みづからをこゝろつと敵情てきじやうを知しらずとて遠地えんちは兵へいを動うごかし臨機りんき
 の將しやうをとらず又問またと周防しゆほうの大内おほうち義貞ぎていと重おもく命いのちをとり
 公方こうほうと接つて屢しばしば大敵たいてきと挫くぐ良將りやうしやうは非あや定隆ていりゆう曰い義貞ぎていよく
 兵へいに用もちましても武備ぶびは懈ゆるして經濟けいぎは疎おろそかし領国りやうこく疲憊へいして
 賞罰しょうばつ行なはず共ともく夏なつと計けい難がたく日近江ひぢやうの佐々木ささき高頼たかよりといえ

定隆ていりゆう曰い名譽なごの舊家きうけのつととも計策けいさく拙つたく士卒しよそ信しんぜび
 何なにぞ強敵きやうてきと防ぼぐん忠政ちゆせい代しろて回まわり日鎌倉ひかまくら兩植りやうち杉すぎハ世々よよ官領くわんりやうと
 職しやくとと兵權へいけんととはあり是こゝは屬ぞく其功そのこう成なり安やすらん定隆ていりゆう曰い朝良ちやうら
 麾下きかは太田おほの道灌みちくわんありととも用もちちと社やしろとと推おしと辛から通家つうけ和わ
 睦むつすと壁かべハ兩虎りやうこの穴あなは鬪むす如ごとく終つひは獵者りやくしやの為ためは獲とれとのと
 北条きたじやう早雲はやぐもハ如何いかん曰い早雲はやぐも智慮ちりよ接群せつぐんのつととも惜哉おしやい無なき詐しや
 カとのとのと信しんとと多おほく矯かへて其友そのともと殺ころして任まかすの將しやうは非あず三浦みうら
 道寸みちすんハ如何いかん定隆ていりゆう頭かぶを揺ゆぐ日三浦ひみうら道寸みちすん千葉ちやう康胤かうけいが如何いかん君きみと殺ころす
 奸賊けんそくなり人ひと是こゝを屠ころすとも天誅てんしゆ逃のがれず何なにぞ共ともの論ろんずらん且かつ
 らんと言い活か活か孫そん何なにの如ごとくふぞ矣やトと金かねハ二七にじち其明察めいさつとと感かんず

暫有て定隆が曰安房の里見義豊の清和の後胤めして正く源
義家の嫡流なり去と恭謙あり人々は敬むず幣公厚して常に
賢士を招き猥に兵を動さずして固く其国を護る今一國は
すまじも後来り必ず天下は顯べり。質を委ねば人々
と有るまは二士拍掌しては亦が凡見此に至らず昔天喜康平の頃
奥羽前九後三年の役は源頼朝父子大に勳功有りしなり
諸士其武威は服する夏久し故は頼朝の義兵を起しる時八州
の士皆其麾下に属す是其功よりて之今義豊其後胤なり。
何ぞ其時より異るらんや。と語るを定隆は我公決せり。愉快
いふべし。とて挑花を摘み酒中は流る再び数盃を廻ししる。

巳は春のころくしき日も三人が奥の足るに居る暮鴉の打
群て棲よ歸るにひびきて大陽の雲削は薄るを賞ふ二士は起て扇
子と披き盛夕の端の終の章を奏てて退ぬ斯て定隆ハ其後
親戚故舊を會へ仕官の志を告ぐるに皆云凡士たる者の家名を
真ん為は遠遊する武門の譽とする所なり。とてや此人の武
技中く尋常輩の及所なく秘を行は發跡する人強て止ハ
却て道理のすすと巳は高議定るも定隆ハ大に喜び也二士
を招き向ふ你達は強せとて房及へ下り里見家へ交んことを
欲す渾家兒子ハ仕官の後速く迎へ給へ。とて其方本圖定
の幹夏くく頼朝ありと有るまは二士掉頭回答よ小の



あつらひ
日泰上人
符呪して
逆浪と
まづめ
まよ



王卷之

不肖のつととども。後來君恩よ治する夏敷年のいま一箇の
 徳を被る夏つ。今君長途は游宦せんす吾侪のつとを落
 従と願はざらんや。況や曩日桃園の盟は撮るもひり夏あり。
 心大姉と令嗣室の姉しるもとも外舅瞿瞿とて家後も
 數多在ハ何ぞ後夏は心と勞しむべき。只顧蹀従とて更よ
 うけひく氣をハ忍びざらん。定隆の妻と象淳と喚べる傍ら
 夫は對ひ言つるよ。郎君家名と揚めんとて仕官の志めと
 より武士の本意と岐侍とて維る否みや。ききしるや聖人の
 教も去身行道揚於名後世孝之終也とかや。兼去去ハ孝
 心の天道とてけひ通く發跡候しるん。兒知稚とていとも生

質健よ已は痘瘡もる。侍とて最早成人よ異つる。況や
 愛情ハ私つる孝道ハ公つる。万私情は惹きおる。大衆の障と
 とも成ぬべし。今二人がやハ郎君と恩ハ忠公の志深よハ必す
 志も黙止のひと。法妻ととも郎君の獨行放心不下もわのひ
 侍と二人が憑托ハ願ひて。願ひて。只管よとて。終ハ岐由は
 あそ左のふかとて。遂は陪従とて行しる。斯く其盟幸い言
 辰つる。今ハ旅行の調度取とて。之妻子と始め親戚故旧は
 啓行の留別し。主従三人ハ房州まで下つとる。えこの好
 人ハ意然の妖嬈するの。とつる。大和唐山の文中も。むと哥せ
 非常の標致する。とて定隆封侯の後も。時間ハ政夏の

補とつらつら夏多しとぞ

第二回 定隆潛行點檢松山城

却規定隆は従ひ固りと急ぐべきの旅をねがはば沿路定所彼の
の城廓山川の要害群主縣令の賢愚土地人民の善悪を
委く探ると知りて来るとより驛路九日を経く漸く武藏
の國神名川の里は抵ると固及路の傍なる茶店の几上は凭
てぞ休らぬ折らば竹を荷ひ栲と杖を杖する曹の同くあり
越ひらる小二を多敷てらどや疎濶は有ゆる去ば去年買
夏あま常陸へ越つとと鬼角生理は好所落さき4頭日
帰つとあり一昨松山の町へ暗肉擔の持行つとと漁獵多は

厭ま却て本錢を減却せりと悟る小二はらば易しこと
あり近日巷説は松山の城経営落成し領主太田道灌公
城の門前は何ら榜文建るとの夏あまふや去ばく其夏
有つと吾侪文盲の其委細はたねども只標榜の下は
左寄人の説話とては這面との城経営些々も繩張の
変所とさし示す者あま賞金百兩賜ふとの夏あまふ
よく吾侪が肩販輩三人寄ると高き却て文殊無利の智
恵仮假ても何卒賞金と受んものとは終日外廓を巡ら
まど殊は異見する夏あまふ其後帰るも不貞とて同伴
て陸廳怖らるら砂礫の上はまどつて但し城廓の扉ハ

石灰ゆて塗るべし火を焚ぐは便宜なるん前門の橋杭は石柱
は倣しものゝ永代の基つるべしと祈るまは官軍が懸靴て癡
漢軍向の妄言を吐と大に嚇と一驚喫と帰るの遅くその
日も彼呼よ運苗一再び房錢を損せしと説法ハ小二と
拍ては邑の先長の次郎曩時よ亡命して鎌倉へ和度支
縣へ官途せしは垣帰して家よあり浩る夏ハ飛巧者
ハ人と同伴し幾論かして夏を倣ハ先客とけよ賞金ハ
必む己と等らうと欲ハ敏き小人の心可笑しは
笑片面く居るも一が定隆やよ小二那道灌公の居城と云
是所より行程のつやど有やと尋ねよ小二貴客と云は地へ

越のふぞ去ハ吾侪ハ西京より房州へ人と尋ねて少る者な
とど格別迂廻の道も非ハ立よりても見くまの之れは
恰頃路の是は這所より向は岐路在て北ハ名よ愈々失口の度
至我父への街道より又東の方海は漆と弓弦と齊と云
下総路道法五里よ豆とすして彼の松山へひらりるを指摘ハ
夫ハ幸い道順と云と吾侪も長途の窮士ども大半盤纏を
消おしぬ去来其方ホは脱駈して其募賞を得んものよ
三人互よ取笑つて茶店ととてハ出よんる定隆行く二士よ
吟き往昔秦の呂不韋已が権威は倣つと指指集めて春
秋と作つて市門よ千金と銀並一字と増減する者あつた

五二六

千金と予へんと有し不同。今道灌左衛門かく慶長は無人
 なる動靜とも傳ふ捧後久は渠奴が意已が兵法繩張と
 自負する。但し世の英支なる者公探つてせん計策あり
 びて公おびてす。因り武技操練の身は活る夏は試つこと
 快く是と悟るる二人の私語をたのむとも當時物志の
 世の中るまが万一敵方の閃光と怪しきも斗羅し。但
 よしく校計しめると有むと定隆お笑ひの難の武靈王ハ
 使者とらるる大敵なる奏国へ獨り行むびんす。例あり。
 丈夫なるもの何ぞ斯る小夏と忍んや。去まども共よこ
 らん人目と隠れ却て夏を惹きせんも知るべし。今計は

是より彼所まで六略三里程と覚ゆ。你們達ハ憎く是
 ろる飯店よ入ると休らひ。多時余が消息が待べしといふ
 めど二人も無理會はれず。早速帰るませ。必平長居る一
 のひそと刃送つる。二人の飯店さし入る。定隆獨
 と疾く走り已は松山の城下よある。先城惶と三連。那
 方這方と點檢す。實は天下よ名ざる良士の築まくる。城
 廓のまば要害必固溜ん方なり。金城湯地とは是るべし。
 と定隆不覚感心し。再び城門の前よある。是れは當て
 市上よ邏門公區へ鐵板長脚鎖排列し。兩三箇の朱漆
 會集柵欄の中よ三箇の標榜を建てる。定時次を擡

て是と續よ

一當城不日造營就但地理之善惡繩張之利害幸

有指示其變所宜上廳所批判合道理正可與賞

金百兩者也

文明十年戊戌四月

道灌

とて記しける定隆故意とて寄て城廓ハ最以固之と雖
惜る二ツの失るゑあり城壁の四面ハ松と植る松ハ不節の
風と含み常に颯々の響公流り必敵徒息入の便る松
樹公植るハ植るるの傍るよ如しと高らかなる字は後ハ歩兵
ハ因付ゆる旅客言てわくは急ぎ帳前へゆく演説し喜

利害と明白よせよけりハ汝賞金を受べ何ぞは安は我相
公ハ排滂やと罵ハ定隆打笑い小子ハ遠指の旅入道と
急ぐ者る且ば汝の相公よ見あり眼なし又徒々他の金
錢と貪るハ丈夫なる者の取とする所之只代懸と以て相公
は傳へよと言捨去んとするはねハねとせば奴は論者言
と巧まは道辭公言經官廳へ引まんとは衆多續ひ圍繞ハ
定隆憶する氣をさく尚行るんとする所を押持おつとり
お急ハ急は僻く身と反け捧先よりて挽持はゆると急
所を觸握る投する警度狼籍と双方よりお急捧と
飛起起續のく持ハ踊越へ礮と右千の目潰し捧取落

廿六後より透穴見合組付と早知つてりといふと信め擔て
 前へつて倒爽倒身は砕易しひるむ呼と定陸ハ逸
 足してを逃去ぬ跡よりうく歩兵も偵入目も脚腰の疼
 と堪へ起上りて呆として共は顔見合思ひの外は弱質奴
 のの間ふらハ逸失り先は懸と進進し追つて
 捕人と言葉と一母は跟蹤うら城内さして欠り必備
 又城主太田持資入道及灌ハ吏卒の折はより自廳前
 出らる隊長千束重兵衛と叫出し即今歩卒亦が注進を
 聞よ其士が後論活動うく尋々の軍をさす汝早速
 跡より追附我が符と傳へ受け礼を厚くしてその者を

再び透ひ来るべし必ずかき入て急忽る廿七と囁く
 傍畏く兼つて其向の歩卒と帶領騎馬の鞭も逸散す
 已は五十余丁ぞ追近めと後其踪跡をたゞせし経
 路は物色し搜索すもと誰とせも其侍は建さばせす
 うと重兵衛の遂に城内へ歸りて廳前を拜りて氣喘
 ら委細むとて言上す道灌一盞茶時歎息し良久して重
 兵衛の對し是全く予が武畧は傲りて城地の繩張を世間
 自負せしるるす如何にも方便を以て天下の英を
 と見出し思ふ加へて管領へ登庸させ余が半臂の按と
 る隣国の大敵なる比奈早雲を防禦せし計を果す

今其人物と見えしつるものも其がむらさきと見えしつるものも
 海に残りて多しとて梅まきの時の人より是道灌已が武略
 み傲る世人と見ゆ如せしむこそ神入のりて是公歴へつるらん
 こは汰しつるころや諸も定隆ハ機変の士ありけり歩卒が圖
 繞と漬しつる外套と腫く両刀をひき巻薦よ包みて齊眉旅
 高の奔り見せたるふぞ追人も取て見強得たるよや已は向の飯
 店さしてありぬまは両士ハ約せし九側の遅刻するとのぼる半
 里ほど出逢たるふ定隆がお扮の姿とつるを怪むが如此このと
 語も各時の機變と賞しありて叔再び飯店へ伴の入酒食お
 喫して後平山勘六小二は對の是より安房の國へ趣き大何の樂

つるべきと身に小二今貴客等陸地とゆせのらむ是よりと
 東より隅田川原へ山下総高師の國府は忽ちいぞ順路ま
 船よそ内海をゆりつるふらう大丸路八九里も捷徑よく即ち是
 より豊前郡よから品川駅へ上総へ通船ありと答ま
 定隆お笑うがら両士は對い今陸地とゆらば名め忽ち隅田の
 流に臨み彼の中將の昔を思ひて一夏回ふもの名も慕はしく亦
 葛飾ハ継橋と名の井ふとの名所ありて往昔の有りと
 つるる兒奈の社も床しく継橋は足の音せぬ妹持の歌を
 思はしむとて是ハ治世安閑の時哥祝する風藻雅人の好所
 今我々の仕官と望む身の上のよはは流る夏ハ専務する余

曩時地獄と圓くふ彼の内海ハ安房相模と港として西総武
 越へける入津あり。房州ハ仕官せむ武畧ノ預る地理遠近
 悉く知ずんば非ず去ハ呂川の舟船とて此の地と云ふも
 なるりと夫より巽ノ道公より豊前郡へ出其日の黄昏計
 別川ハ多の巴の旅亭に入て通船と問ハ幸い翌日上流へ
 ありと安のるは此の地三入宿を占め旅館の客廳は夜
 更るまで昼松山の活むごとく内がなる

第三回 泰師渡海符咒鎮連浪

松風夢と破て涛長自ら旅愁と流へのと傳へてさるる海
 のうらゝの朝もたつる年人の髪してや。旅人建起こま

早出帆なりと告るあぞ旅客ハ急遽起出ると盪漉間もさく
 衆皆燈前ハ朝餐と喫一つ行装とすくは小舟よりさるる二丁
 程棹さし本船より移り下りて味爽き霧の中よちりく病
 鷺の叫びや各舟ハ渾人の刺くと後焚さるるどんて実
 浦口曉の光曇るり定隆船は素く澳翁夜添西岸宿曉酌清
 相燃楚竹と柳柳州が待公獨ち返り吟居りる宿りる船
 子の櫓と起し帆公上まば東方漸く白らみ紅日扶桑を松
 出つよつと曉鴉剥啄くと東西ハ飛翔つと海は緩く地と浦
 と離るる近岸の難大も次第よ安遠くつと名海面線と
 志て水天一色空をたんとて萬頂の新席公浦るが如し人々船

中ノ圓居一風帆の穂を引つて遊び互々國所の物語を語りて
 奥ト多る定隆母子は對のやよは海に名をこする袖師が浦と喚
 びあり何地とさして言らるるやと問ハ舟子さまは其處ハ幾
 度う旅人達の尋ねりしと我輩今際より六ヶ敷浦の名ハ具々を
 知らばやとすとみづらた舟子の挨拶は傍より年の次五十余歳
 男のさし出く諸客達のいふごとくは海の名勝とも知らぬゆへハ
 少子憚らうとら御り語りて波せやと有るは衆皆其ハ
 何より望みあり願はくハ船中の徒然は性して波せありと
 又たたまま自賢げなる類して火繩箱叩きつゝ抑は海ハ往昔
 日本武尊天子の勅命と羨つと東夷と征伐なりのひしし時

相摸の國よりいふみし上総へ渡つとみづら海神の祟を
 大浪起つと尊の船と願ふとす時ハ尊の妾橋媛とちが附
 添ひ居のひしが尊の命よかりのみ自ら水中に入らせしを
 暴風忽地吹止く尊の船ハ女徳よ上総の國を越岸せり
 是後世関東と吾妻と呼らるる瀬觸とかや其せら媛の衣裳
 海に破裂し御袖どもハ散らるは浦は漂はるる故に今の
 世ハ袖師が浦と呼らるるや又一説ハ房総相模江て五ヶ國の
 入海其形宛も振袖に似ると以て名附しとも又万葉集に
 奈都素奴久宇奈加美我多能於妓津渚尔布征渡等持
 采年佐夜布氣再家里と續らるる海上ハ則は向地海上

郡の海辺を呼ぶこころと結るもどき合様人の奥へ入るも
 悉き物落るる今日幸に我もかゝる学者と同船し海
 の名所舊跡をめぐりてはく知つてうと慶をなさるるも耳学の
 面目とこそていへる已に海上四里程もさかしく波上
 の鷗忽々群まつ、高く翻翔を定陸両土に對の予今曉天
 象と觀るるは参星をかく西南に動揺す。りくは暴風や有
 べきと思ひつるが斯早の山海一牧時六越渡るべきことひ
 ちよ今時の高飛するをそむ得縁と皆く空を仰いで所は流
 波嶺の方よは雲の黒雲あつと見えへる所は一陣の風僅と
 吹落すとひとく海面白浪を翻し船は忽舵を折り外

海の方へ漂流は水主舵取の周章一急は忙か下げを要せ
 荷物ハばさずとね弁色ハ船中の様人の殊更恐怖號泣一抜
 子の上よひは伏く皆合掌同音は佛神の室を祈念するもの
 外ぞうれまきども風ハますます熾しうの波濤山を登り攀手を
 碎く状とる一柱とくく多雷霆の如く揺擧る千丈の岡
 に登るが如く。あつとちらせが萬仞の谷は陥るごとく。嗚呼哉此船
 中なるごとくと見下時船中は一箇の僧在し直に船の軸
 先は衝立ぬひ大音を大衆妙典を唱へ自ら咒文を書き
 海水は投入るべし。やがて念彼觀音力波浪不能没い。空言
 空しくす。今迄尾籠の岡より高きは波浪刹那に靜りたる

こそ奇特なる船中の老若男女嬉々獲生の心地となり
 帰る高僧等梵梵の尊きと感ふ事定隆私に其人を見らば
 容貞端正にして長眉清眼慈順其面は腹の實に非常
 高僧の形相なりと雖も堂々其前より礼拝し塵俗今日宿
 縁ありてこそ同船し性命を再活せしむ有縁なる但
 上人は何れの御人か何の所へ祈せめめと尋むる貧道ハ
 下総濱越の山寺に住する残き生家と云ふ今日海上の危難
 風浪の忽地溢つて是全く貧乏が力にあらず佛の本
 妙典の功力と謙譲は答へぬバ諸人の益其及徳を感
 ける斯く船ハ衝く渡世の浦へ悉く是バ旅人の残らす

陸へ各低頭合掌し上人へ二天再造の恩を謝し奉る事
 別まなる去と定隆は從斗の師の心跡は眼を從ひ寺門は
 入と恭と云ふ三宝尊前より礼拝し更し武人閑運の夏と
 問まると上人曰ふ只一向慈悲と本と固く守りて信
 公と失ふ事朝夕大氣妙典を修すべしと云ふ事
 従ら再び上人は清なり受戒つて後定隆の弟子なり
 幸に後世郡國の至りと成るが封内残らず師の妙法は歸
 甘んじんとて誓ひたり則其夜の寺中より止宿し清の翌日
 衆皆悉く上人は眼をひらき安房州さしそ下つてけること
 後世上総國より七里法花を園さるる機運の始と云はける

第四回

定隆驍勇踏山斬白狼

漢者走剽木者走山とて坂井定隆の後世を起て上総
 路の邊りと浦辺の道公傳ひ二日と登りて同國天羽郡百
 首村へ至るや少く暫く測景か刃を以て已に日時はさうの
 ちなる傍らるる家よま寄は呼ぶるに鋸山をわいの程の道
 うるやと尋ねば今一里ありといふを原末裾山は房総の段よ
 て山路崎嶇なりと波ども一里計ハ雲霧を越ちづりりるを
 其のり路を急たつて行きて已に二里程も歩くと覺せども
 尚其野はぬねぬ且疑ひ且歩み路人は其後を尋ねぬハ
 うと其所を六一里ありと告る小を平山勅六より一程急る

駭かるまは忽眼を瞑らる已に浦津を渡するに我亦他國より
 來まはは狹路に熟せざるを知りて其を要ると覺へて吐其
 うが許すまはと刀の柄よみかろくまは路人ハ大に一驚を
 許さざるへと云まはははも刃を以て逃去ぬ定隆祇笑する
 かり勅六を押しめ是彼亦が我くと瞞せしは非ず上総の俗
 こそ二里といふは是れさうめ夫よは附きりしはは方の不
 念らる去らる日既も晩なり如何なる
 兩人今より裾山を越るや究く夜よ入ぬべし
 峻岨のりと波は所詮百首へ至るや外より
 定隆のや今房州へ仕官の首途銀一里ありと云

戻らば本意をわすれず但し此辺のよき里に有らざるやと問ふ
平内遙く指點しあまの山下の叢樹中幾一箇の草
家見への爰に寝て強く病を瘳むとす夫より細き畦
道に歩ひつゝ三人の薄被の茅屋へあまの落内を
さし覗かば老人夫婦の若と見一人の簀の上は草鞋を造
一人の爐は當つて松多ふと燃居るさるゝ平内つゝ入我
の房州へ通る旅人づつが路は迷ひて不覚日を暮しつゝ何
卒に家よ一夜と明させぬらんやとあまの夫婦ハ之を見
ず何れも易に夏よりとては所ハむらうり赤縣の控む
旅人と止宿の夏ハ寒き禁令也去ハは遠外は西三箇の農

家もひが何れ宿ハ許しやまがまして我亦ハ此實のどく
年老家貧まゝく豊業とて成維くやうら草鞋を造り
路辺よむく往來の人は驚き其日の給よの丁の身分
るまが中く外は米穀の時とてまぬ一継令止宿はくも
何れ炊てや糸くせん去共今うら鋸山を越るは必室夜
入ヤバ一且は鋸山ハ狼多き所ゆゑ近郷の者とて常は
怯アハは一箇の白狼ありて兇猛最其く動もす
白昼とて往還へ出間々人を傷ひひるまが今晚
越るよ夏ハ止めるひ明日山越るまがべしとて定座
何鋸山ハ惡所よく白狼は人を害する夏の甚し

一
一



曉勇の
壯士
鋸山
白狼と
斬

あつと人々を睨まざるが暫く空の霧の應と一交りや否や
邊の樹林蔽くどく数十の狼を以て入と圍繞るる去る
復ともせず路頂の巖を小首ふし眼を配り待掛の白狼は
と擺い牙と齧定陸と目執花をうと引外して切附を叫で
跡へ飛退りて遠く窺ひてぞ呻居る二士の衆多の狼と去る
引更く寄ら難くを拵ひ切り身を攪き平働ぬ白狼猶も咆
狂の土と蹴まき跳かると身と解く毛と皮は膳深く斬り
たうと去まどぞ猛獸表へず定陸が頂上を踊越んとする野と
ま尻刀と衝上すバ誤るる腹中を一尺計切き死るるおと白狼
よるり得ず之は僅と少くと遠きが飛込一刀は首八寸

村路にぬ二士は其の力と進み来る狼と前後より二預刺と
わければ勢ひも忍ぶるを羣るる狼を向遠く逃退るる
爽利懐中より鑽具と拵りてととらるる彼小堂の茅庇へ其
ま火と七点の折を山風吹生し火氣散くと竹木を燃
つき輝爛るる管の思もく群居る狼の何れもさく
逃去ぬ定陸今ハ易く白狼の首とり彼撞棒は御付
兩人よさし荷目を急ぎ山と下りつづ漸く保田の村へつき
る時已は日本寺の半夜の鐘鐘くととと破くるる空陸雨士は
對の今深夜よ人家を起すも我も打拵を見穴中く止る
ハ許さるる野徑里長よかると泊らるる如くを走り路頂に

榜文ある。耳房の氷を破りて門を敲く。敲き金バ良あ
 つて内より園丁と見えて起る。何気なく門の便所を開
 ける。三人と見ても内へ跑入。後戻りせず。盗賊の入り口を
 失合くと呼ぶ。呼ぶ声。園宅遠く。騒擾し。周章して竹燭踢
 消せ。東西知まぬ。黒暗地柱は觸れて面は疵つく者あり。六
 林より墜て腰を折く者あり。吠く。鑄金を破る者あり。六爐
 は船で火傷する者あり。火停あつて燭火を来す。小二と
 始め。僕ども皆怖る。尻臍索の禪は身と固む。竹鍵。利鉄
 撰擔。手に持て。庭中へ集會。入バ撲んと。闇ぬ。定陸。おぼ
 て。衆人。まろ。静らる。言。夏あり。我く。全く。落草。まろ。今。安

通る者。うろか。今夜。鋸山。は。徑過多。くの。狼。の。失合。殊。は。二箇の
 白狼。勢。ひ。甚。猛。う。ろ。か。忽。地。我。刀。尖。は。除。け。り。燈。籠。は。是。と。見
 る。べし。と。彼。の。白。狼。の。首。を。握。り。門。より。内。へ。投。入。ま。り。衆。皆。寄。り。ま
 る。驚。愕。扱。も。勇。成。人。建。る。ま。い。白。狼。と。七。年。久。く。鋸。山。は。住。ま。り
 と。傷。つ。と。數。知。ま。ら。ず。る。ゆ。ゑ。近。國。の。者。ま。ま。も。怖。畏。ま。す。し。の。ふ
 夏。の。一。然。る。と。今。夜。貴。客。建。の。容。易。は。除。け。る。と。寔。は。九。人
 の。所。為。る。ま。す。小。的。們。か。り。豪。傑。と。知。ら。ず。親。と。唐。突。の。所
 夏。倫。は。寛。恕。の。ま。す。と。只。管。屍。高。首。下。て。七。位。ま。り。る。夫。の
 三。士。と。客。廳。へ。伴。ひ。止。宿。さ。せ。明。ま。り。里。中。の。男。女。傳。へ。は。其。時。に
 訪。つ。る。日。頃。我。く。山。行。の。障。り。と。一。は。惡。獸。貴。客。方。の。武

勇ハヤシより一朝ヒトツキ除ノゾクるもてハ滅ハ莫ナク大キのヒ忍ム人ノスラリと酒サケ肉ニクと
 持テ搬カ三ノ士ノの者ノと款ケ待マ一ノ猶ナ暫シくハ地ノ一ノ遍ヒ苗タのハとハ勃ツむ
 とハ唯タ先ニ程ヲと急ニぐ者ノと有リ一ノ廿ニすハくハ則チ美シ飛ビるハ鞍ヲ
 置キ馬ヲと出シて三ノ士ノと衆ノ人ノ跟ヒ從ヒ路ノ程ヲ三ノ里ノ計ヲ定メて
 別ニ歸ルとス。

忠孝王比傳卷之一終

是の
 一
 〇

